



## 特集「人口減少社会と環境」の編集にあたって

人口減少は社会に影響をもたらす、その影響は結果として人の環境にも及ぶ。一般には、人の活力の低下としてとらえられ、児童数の減少、若い労働力不足、さらに農村部等での高齢化の進行により、村落社会の継続すら困難になるというマイナス面を指摘する声が大い。一方で、日本の江戸時代の人口が、多産かつ生育障害、飢餓や疫病等で、結果として人口収容力の範囲で維持されてきた水準と比較すると、予想される21世紀中の人口レベルはそれをかなり上回るのであって、減少そのものより、どこで安定するかという安定レベルが、現在の特殊出生率では見通しえないという点が重要という意見もある。さらに、競争と過密のなかで生活やビジネスを進めてきた日本の社会が、空間や容量の限界に対して本格的に初めてゆとりを中長期的にもちうる点を生かして、あらためて望ましい社会と空間を設計しうるチャンスととらえることもできよう。

本特集では、人口減少をドライビングフォースとしてとらえ、環境にとってはプラスにもマイナスにも働きうるという考え方から、それを良い方向に導く対応（レスポンス）と、環境と社会経済の持続可能性を高める戦略等について論及していただくこととした。

巻頭言では、高橋潤二郎氏に包括的なお言葉をいただいた。そして、まず藤正巖氏に「人口減少と環境問題」について、「人の生存と環境の関係は第一義的には人口に帰結する」との立場から、将来を展望し予想される人口動態と人口が内包する環境への課題等を論じていただいた。そして、氏の「政策によって変化すると思われる社会構造の予測をまず行ってから、施策を実施することが必要である」との指摘もふまえ、田村省二氏には「持続可能な国土管理」について、国土形成・利用計画策定のために設けられた、持続可能な国土管理専門委員会でのこれまでの検討結果などをもとに、人口減少社会における「国土の国民的経営（新たな公としての「市民の参画」）」などの、持続可能な国土づくりについて紹介していただいた。

ついで、具体的に徳野貞雄氏には「人口減少時代の農山村の“ゆくえ”」について、「極小世帯化を直視し、人間関係資源に着目すべきである」との立場から、いかに「基本的には農山村に住む住民自身とその他出家族達の動向」が重要かを論じていただいた。また、鬼頭宏氏には「江戸時代の環境管理と住民参加」について、環境先進国「江戸」の環境管理・住民参加のあり方をモデルに、人口減少社会における環境管理・住民参加のあり方を論じていただいた。

また最後に、白井裕泰氏には「ものづくりの継承」について、「文化としての家づくり」を例に、貴重な伝統文化・技術継承の視点から、人口減少下において地域社会を支え、ともに歩む（地域資源を活用した）産業としての、魅力のある物づくりのあり方について論じていただいた。

これまで、人口増加は環境破壊の元凶とされてきたが、ではたして、人口減少社会にあってわれわれを取り巻く環境問題はどのように推移していくのだろうか。本特集が、いまだ論及の少ないこの分野での、さまざまな議論の若干なりとも契機となれば、幸いとするところである。

（編集委員 大槻 忠）